
劇団Siki

雨天決行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劇団S i k i

【Nコード】

N 4 3 7 3 G

【作者名】

雨天決行

【あらすじ】

春夏秋冬・・・あなたの好きな季節はどれですか？（本編の内容とはおそらく関係ありません）更新は不定期です。

開演 朝一番のから騒ぎ（前書き）

初小説です。読んでいただくとありがたいです。

開演 朝一番のから騒ぎ

ここは、安芸波町。あけはちよう君の心の中・・・じゃねーや、まあ、どうかにある町。

そして、この町に一軒だけ存在するスイーツの専門店『甘ったるくて、どもすませんした』から、たった今出てきた少年こそ、この作品の主人公

・・・の一人である。

「行つてきまゝす」

少年はそう言うと、ダルそうな足取りで歩き出した。
そう、ここは少年の家なのだ。

「ども、あかつき はると春斗、安芸波学園高等部どえゝす。」

偶然にも（？）、自己紹介風の独り言を言った春斗だった・・・

「や、ゼツタイ偶然じゃないでしょ、ソレ。」

春斗のお隣さん兼幼なじみ兼クラスメート兼この作品の主人公の一人である甘里かんざと夏魅なつみが朝一番に彼にかけた言葉は、
「おはよう」的なアレじゃなく、そんな言葉だった。

「んだよ、しょーがねーだろ、作者が俺の紹介するタイミング見失ったんだから。あとおはよ、ナツミカン。」

春斗は、ボサボサした髪（本人曰わく無造作ヘア）をボリボリとかきながら夏魅に独り言の理由を述べ、あいさつをし、彼のみが使う彼女のあだ名を言った。

「~~~~！！その呼び方止めてって言ってるでしょ！！あとおはよ！ハル！！」

夏魅は、激怒しながらも、彼にあいさつをした。

「いいだろ、別に。それに、普通に呼んだら芸がないだろ？」

「無くていいわよ！！そんな芸！その呼び方、なんかバカにされてるみたいなんですけど！！？」

「バカになんかしてねーよ！俺は！・・・ただ・・・ただ！」

「ハル・・・・・・・・」

「おまえの怒った時の顔が面白いから！おまえの怒った時の顔を見たいから！この呼び方をしてるだけだ！」

「もつとタチ悪いわ！思い入れがあるとかじゃないの！？そんな理由なら止めてよ！」

「え〜ヤ〜ダ〜」

「だだをこねるな！」

言い争う二人に、

「その辺にしたらどうですか？二人共」

二人の後ろから歩いて来た少女が言った。二人に声をかけたこの少女は、一日千秋。^{つたち}_{ちあき}二人の幼なじみ兼この作品の主人公の一人だ。

家は、夏魅宅の向かいに存在する。美しい黒髪に整った顔立ち、大和撫子と言う表現がピッタリの少女だと僕は思いました。アレ、作文？

「ヨーツス、千秋。」「ううつ・・・おはよ、千秋ちゃん」

あいさつをする二人に千秋は、

「大体、毎日毎日そんな事で揉めるのは止めてくれませんか？イヤになる位鉄板で焼きますよ？」

脅迫をした。

「どこの鯛焼きだあ！コンマー秒でイヤになるわ！！そんなモン！！」春斗のツツコミにしかし千秋は、

「断末魔をあげても、止めたりしませんから。焼くからにはやっぱりウエルダン」

と、純真無垢な笑みを浮かべて言った。

「ステーキかよ！つか、遠回しに『殺す』って言うてね！？」

「言うてません」

「千秋ちゃああん！？なんで間を空けたの！？なんで無表情なの！？なんで目えそらすの！？あの雲はなぜ私を待ってるの！？教えて、

おじい・・・千秋ちゃああん！」

夏魅は千秋の肩をつかみ、ガクガクと千秋を揺らした。

「・・・おはよう……」

「うをわあああー！」

突然後ろから聞こえた声に、春斗は驚き、マンガみたいな叫び声をあげた。

「なんだ、冬輝か、おはよ」

「おはようございます、冬輝君」

「えっ！？えーと・・・おはよ、フユ」

春斗、笑顔に戻った千秋、そんな千秋に戸惑う夏魅の順にあいさつをした。春斗の後ろから声をかけたこの少年は、白雪しじゆき 冬輝ふゆき、三人の幼なじみ兼この作品の主人公最後の一人である。基本的にあまりしゃべらないが、顔がカッコ良く、背も高く、さらに頭も良いので、「クールでステキ！」となり、まあ、モテるワケよコレが。

「聞いてよ！フユ！ハルったらね

「なんだよ」ハルは黙ってて・・・っていない！ねえ、千秋ちゃん・・・もない・・・ねえフユ・・・もないや・・・ハハ・・・」

キンコンカンコン・・・

4人が通う学校、安芸波学園の鐘が鳴った。

「・・・遅刻だ　ハハ・・・あの薄情者共オオオオ！！

！！！！」

夏魅はそう叫ぶと、学校へと走り出したとさ

・・・めでたし　めでたし

「どこがよオオオオ！！！！」 by 夏魅

開演 朝一番のから騒ぎ（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。 評価・感想をお待ちします。

第二幕 てぐしでも割と整えられる（前書き）

今回は春斗目線です。というより基本そつなるかも。

第二幕 てぐしでも割と整えられる

「……ぜエ、ぜエ……」

「ギリギリセーフだ、やるな、ナツミカン」

「やはり、人間死ぬ気になれば不可能はないと言う事ですね」

「……同感」

顔を真っ赤にし、わざわざ朝からセットしたであろうショートボブの髪を乱し、額から汗をダラダラと流しながらも、なんとか学校に間に合ったナツミカンに、俺、千秋、冬輝の順に言葉を贈った。「うるさい！大体、一言ぐらいなんか言ってくれてもいいでしょ！？『遅刻するよ』とか、せめて『遅れるから先いくね』とかさア！！黙って行くってどうなのよ！？今までずっと一緒に通学してきたのに！おかげで進級初日から遅刻するとこだったじゃない！」

そう、春休みも昨日で終わり、今日から俺達は高等部の二年生だ。ちなみに、この安芸波学園は、初等部から高等部までがあり、今日の始業式はその全員が参加する事になっている。俺が解説をしている間にナツミカンはある程度回復したらしく、手鏡で自分をうつし、てぐしで髪を整えている。

が、そこへ

「はい、みんなそろそろ体育館に移動しなさい。始業式が始まるわよ。」一年の時担任だった白羽しろは 御鳥先生みどりの声が響いた。白羽先生は二年程前にこの学校に来た若い先生だ。優しく、顔が可愛く、生徒の悩みも親身に聞いてくれるいい先生なので、男女問わず生徒の人气が高い。

「うあ、センセちょっと待って！」

髪の設定が終わっていないナツミカンがうろたえる。諦める。

大体髪をセットした所でたかが知れていたいいたいいたいいたいいたい

「てめ、ナツミカン！ なぜ俺の耳を引っ張る！？」

「今失礼な事考えてたでしょ？」

「なんでンな事分かるんだよ!？」

「分かるに決まってるでしょ！？何年幼なじみやってると思ってるの！？」

スゲーな、幼なじみ。

てゆーか、助けて、残り二人の幼なじみ。千秋、・・・はニコニコ笑ってこっちを見ている。可愛い笑顔なのに、この状況ではイラっとしかない。冬輝！お前だけが頼りだ！っていねーし！・・・
・・・つーか、俺達三人しかいなくね？

と、その時！

ガラッ！

何者かが教室の扉を開けた。そこにいたのは！

・
・
・
・
・
白羽先生だった

白羽先生は苦笑いをしつつ、言った。

「何してるの、あなた達？もう始業式終わったわよ。早く自分のクラス確認しに行きなさい」

「
「
・
・
・
あ
・
・
」
」
」

俺達三人の声がハモリ、教室の中に響いた。

第三幕 俺の後ろに立つな！！（前書き）

評価・感想をいただけるとありがたいです。

第三幕 俺の後ろに立つな！！

ぐつもーにん、春斗です。始業式に参加し損ねた俺達は、先生に言われた通り、クラス表がある体育館前に来ました。

さつさとクラスを確認して教室に行かないと、新しい担任にブチブチ色々言われたり、新しい担任に二年デビュー早々目をつけられたり、新しい担任にブチブチ色々言われたり、最悪の場合反省文書かされたり、新しい担任にブチブチ色々言われたり……。まあ、とにかく面倒なのですが、その前に千秋に気になっている事を確認する事にしました。

「なあ、千秋」

「なんですか、春斗君」

千秋は、俺が

「呼び捨てでいい」と何度言っても君付けで俺の事を呼ぶ。多分、クセなんだろう。「冬輝は？ひょっとして一人で引っ越した？」

「何言ってるの？ハル」

ナツミカンが言う。千秋も同じ事を言いたげに首をかしげる。

「フユならずつというじゃない」

え、どこに？

俺がその問いを口に出すと、二人は声をそろえて言った。

「ハル（春斗君）の後ろに」

え、俺の後ろ・・・・・・・・・・ってエ!!!

「ギャアアアア!!!」

後ろを振り返ると、そこには無表情な冬輝がいた。

「オイイ！今朝といい、なんでおまえは気配を消して俺の後ろに立つんだ!?」

沈黙の後、冬輝は答えた。

「・・・・・・・・マイブーム・・・・・・・・」

「「「・・・・・・・・どんなブームだアアアアア！！！！！！」」」

俺達の三位一体ツツコミにも顔色ひとつ変えない、冬輝なのでした
（「今日のわ。」風）

第三幕 俺の後ろに立つな!! (後書き)

書きたい事を文章にするって意外と難しい・・・実感した。

第四幕　そーゆーの

さて、クラス表でクラスを確認した俺達は自分たちのクラスの教室に向かっていた。

「ちなみに、4人ともB組だったんですね」

「……千秋ちゃん、誰に話してるの？」

「読s……夏魅ちゃんの後ろに立ってる人ですよ」

「え？誰もいないけど……」

後ろを確認し、首をかしげるナツミカンに、千秋はキョトンとした顔で言う。

「いるじゃないですか、頭に又ンチャク刺さった全身血だらけのおじさんが……」

「ちょ、ちょちょちょちょと！いい加減な事言わないでよ！千秋ちゃん！そんな人いないよ！？大体、頭に又ンチャク刺さったってどゆこと！？刺さるような器物じゃないでしょアレエ！」

「ちよっと」をラップ調にいいながらそう返すナツミカン。

そういや、千秋ってそーゆーの見えるんだっけ……

「いますって、あ、又ンチャクがブラブラ揺れて夏魅ちゃんの頭にかすって……」

第四幕 そーゆーの（後書き）

自分で書いというアレだけど、なんか夏魅がやけに損な役回りな気がする・・・

第五幕 やつと・・・ついた（前書き）

評価・感想・ダメ出し等をいただくとありがたいです。

第五幕 やつと・・・・・・・・ついた

ぐつもーにん、えぶりばでー、春斗です。千秋の、というか、ヌンチャクの、いや、血だらけのおじさんの、いや、全部か。先ほど言った人たち（？）のせいで、ナツミカンはずっかりへこんでしまいましたとき。

めでたし、めでたし。

や、まだ終わらないよ？

で、俺達はすっかりへこんだナツミカンと共に教室へと向かっている。

「うう・・・・・・・・ヌンチャク・・・・・・・・血だらけ・・・・・・・・おじさん・・・・・・・・ピク○ン・・・・・・・・」

重症だな、こりゃ。

「そんなにへこむな、ナツミカン」

そんなにへこむナツミカン見たら、俺・・・・・・・・俺・・・・・・・・！

笑いが止まらねえ

「人の不幸を笑うなあ！」
「ひでぶっ！！」

ナツミカンの黄金の右が俺の頬にクリティカルヒットした。つか、なんで俺の考えてる事分かったんだ？俺笑ってねーのに。

「幼なじみだからよ！」

「またソレかよ！スゲーな幼なじみ！」

「……………着いたぞ」

冬輝が言う。

いつの間にか二年B組の教室の前。

「着いたああ〜」

ため息をはきつつそう言うナツミカンに、千秋が言う。

「ええ、憑きましたね、夏魅ちゃん」

「……………ん？」

「……………千秋ちゃん、今なんて？」

「いや、着きましたね、って……………」

「いやいやいやいや！！今明らかに言い方変えたでしょ！？憑いたの！？ねえ、憑いたの！！？」

答えて、目をそらさないで！千秋ちゃん！」

っーか、なんで言い方変えたってわかんだよ……

「幼なじみだからよ!」

どんだけスゲーんだ、幼なじみ。

と、そんな事を考えていると、

ガラッ!

教室の扉が音をたてて開け放たれた!!

その扉の先には……!!

「いつまで廊下で騒いでいるのデスカ? 早く教室に入りなさい」

B組の担任兼英語の先生の笑美^{えみ}・カルシファーが立っていた。

第五幕 やつと・・・・・・・・ついた（後書き）

自分で見て思ったのですが、教室着くまで長くね？

第六幕 出席番号はわりと大事？（前書き）

出席番号は大体十番あたりでした。

第六幕 出席番号はわりと大事？

「次から気をつけナサイ」

俺達の新たな担任、笑美・カルシファー先生が俺達に言ったのはそれだけだった。

ブチブチ色々言うわけでも、反省文を書かせるわけでもなく、だ。
こーゆー人なのだ、この先生は。

あ、みなさんどーも、春斗です。

先ほど先生からありがたいお言葉をいただいた俺達は、指定された席に座りました。

ちなみに、俺の席は窓際の一番前。どうやら俺は、出席番号一番になってしまったようです。なんか面倒くさそうじゃね？出席番号一番って……。

ちなみに、ナツミカンは十番、冬輝は十五番、千秋は二十番になったようだ。

席についた俺は、教卓でなにやら話す笑美先生（名字だと長いのでこっちで）を見る。

笑美先生は白羽先生と同時期にこの学校に来た若い先生で、名前から分かると思うが、ハーフだ。髪はきれいな金色で、瞳は海のよ

うに深い蒼。じつと見てると吸い込まれそうだ。『笑みが美しい』
と書いて笑美だが、俺はこの人の笑顔を見たことがない。いつも無
表情かつ冷静で、クールビューティーという表現がぴったりだ。

日本語と英語、どちらも話せるが、なぜか日本語は少しカタコ
トで、語尾のあたりは字で表現するならカタカナだろう。

「では、暁君カラ」

「え。」

解説みたいな考え事をしていた俺は、名指しによって現実に戻
された。

「前に出て、自己紹介をして下サイ」

どうおええええ!!?!

自己紹介イイイイ!!!!? 一年ならともかく、二年で自己紹
介!!? しかもトップバッター!!? なんで出席番号一番なんだよ俺え!

……びーしょ。

第七幕 春斗の放課後

……みなさんどーも、春斗です。

全員の自己紹介が終わるのとはほぼ同時に本日の最後の科目であるロングホームルームHRが終わり、放課後を迎えました。

ほとんどのクラスメイトが帰り支度をする中、俺は机の上に突っ伏し、自分の自己紹介の記憶を抹消まつしょうしようとしています。

え、自己紹介で何言ったかって？ 記憶から抹消したくなるような事だよ。

それだけしか言えねー……。

「あの、大丈夫……？」

声をかけられた俺は、記憶の消去作業を一時中断し、声の方を見る。

そこには、読書が趣味で、血液型はAB型、五月十日が誕生日の出席番号28番夜月流那やづながいた（本人の自己紹介より）。

一年の時はクラスが違っていたので面識は無いが、第一印象は『真面目そう』だった。

「えーと、流那、だっけ？」

「えっ！？は、はい……。」

しまった！いきなり呼び捨てはマズかったか。

「ゴ、ゴメン！いきなり呼び捨てしちゃって……。」

「う、ううん！呼びやすいように呼んでくれていいから……。」
それより、大丈夫？」

「え？」

「いや、あの、自己紹介終わってからずっと元気なかったから……。」

「心配……してくれてたの？」

俺がそう聞くと、彼女は答えるかわりに一度だけ頷いた。
クラスメイトになったとはいえ、面識もない俺を心配して、話しかけてくれるなんて……。

「優しいね、流那は。大丈夫だよ、心配してくれて、ありがとう」
俺はそう言っ、彼女に笑いかけた。

「ふあ！？そ、そんな、優しいなんて、ありがとっつて……。」
きゆう

流那は気絶してしまった。

「お、おい！流那！？おい！保険委員！はまだ決まっていなかったんだっけ！？」

俺は保険委員がまだ決まっていなかった事を思い出すと、流那を抱えて保険室へ向かった。

第七幕 春斗の放課後（後書き）

最初は自己紹介の話を書こうかと思いましたが、いいカンジのヤツが思い浮かびませんでした・・・。

第八幕 夏魅の放課後

みなさんこんにちは、夏魅です。たった今、幼なじみであるハルが何やら叫びながら教室を出ていきました。なんか、誰かをお姫さま抱っこしてたよーな……

それにしても……ぷっ！

ハルの自己紹介、面白かったー！まさか教卓であんな事言うとは……

え、何言ったかって？……ゴメン、面白さを共有したいのは山々だけど、本人の名誉のために言わないでおくわ。

さて、ハルはどうかいっちゃったし、フユと千秋ちゃん誘ってかえろっかな……

なんて考えてると……

「夏魅ちゃん♪」

後ろから私を呼ぶ声が。

振り返ると、そこには、ポニーテールの小柄な女の子がいた。

「キラちゃん！」

私はその子の名前を呼ぶ。

彼女は皆星^{みなほし}煌里^{きらり}、愛称キラちゃん。中学の時、同じクラスになったのがきっかけで友達になった子。そっか、今年は同じクラスになったんだっけ。去年は違ったけど……

可愛らしくて、人懐っこくて、もう、ホントにギューッてしたい！頭をわしゃわしゃ撫でたい！ほおずりし…………

「夏魅、ちゃん…………？」

ハッ！いかんいかん、意識が…………

「ゴメン、何？」

「いや、一緒に帰らないかな…………って…………」

ああ、そゆこと。でも、フユと千秋ちゃんは…………

「白雪君、一緒に帰ろ！」

「千秋さまあ！一緒に帰りましょう！」

「てめ、ぬけがけすんな！千秋様と帰るのは俺だ！」

うわあ、新しいクラスメイトにもみくちやにされてる…………。

「…………帰ろっか、キラちゃん。」

「うん」

ま、あの二人なら大丈夫か。

…………それにしても

ハルの奴、一体どこいったんだろ…………

ま、
いつ
か！

第九幕 冬輝と千秋の放課後

『千秋さまあゝ！どこですかあ！？』

『白雪くん、どこ〜！？』

ここよ。みなさんごきげんよう、千秋です。隣にいるのは冬輝くんです。

さて、うつとうしい虫ケー・・・コホン、すいません、うっかり本音が・・・。

しつこいクラスメイトたちからなんとか逃げ切った私たちは、これから帰るところです。

夏魅ちゃん是他の子と帰るみたいだし、春斗くんはどこかへいつてしまったし、今日は冬輝くんと二人きりで下校・・・

やアーン！なんか緊張しゅりゅ！

・・・なんて事はありません。
ぶっちゃけ、飽きました、この顔。

整った顔立ちは3日で飽きると誰かが言いましたが、友達になったその日から飽きました。

見るのはイヤになりませんが、別にわざわざ見たいとも思いません。

アレ？私ってひよつとしてぜーたくなですか？
・・・まあ、それはさておき・・・

「つながった？冬輝くん」

そう聞くと、冬輝くんは首を横に振る。

実は冬輝くんはさつきから春斗くんのケータイに電話をかけているのですが、電源を切っているらしく、通じません。

ハッ！まさかこのまま行方不明とか！？

そんな！！！！こんなことなら、こんなことなら…………

…………生命保険かけとくんだった…………コホン、もっと思い出を築くんだった！

うう、春斗くん！安心して！君の部屋のテレビの裏にある君のへそくりは、私がい切つてあげ…………

『あ、千秋ー？』

突然聞こえた聞き慣れた声。その発生源は私の耳のすぐそば。横目で見ると、そこには私の耳にケータイをあてる冬輝くん。

『わりいな、心配かけたみたいで。俺は大丈夫だから』

「そうですか。よかったです。」

あーあ、せつかくの臨時収にゆ…………コホン。

『ああ、俺のへそくりが誰かさんの臨時収入にならなくて、よかつ

たよ
『

．．．．．え？

『．．．．．じゃーな、あと、へそくりのありかは、テレビの裏じやねーから』

ブツツ！ツ——．．．．．ツ——．．．．．

「．．．．．恐るべし」

それだけ言っただすきだす冬輝くん。

．．．．．右に同じ。

第九幕 冬輝と千秋の放課後（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。第九幕は、実は冬輝をナレーションにして、新キャラでもだそうかと思いましたが、断念しました。・・・・無口なんだもん、コイツ。

第十幕 流那な春斗の放課後——1（前書き）

流那目線です。

第十幕 流那な春斗の放課後——1

みなさんども、流那です。

あたしは今、本日からクラスメイトになった、暁君（春斗の事）に話しかけようとしています。

私が今立っている位置からは、机の上に突っ伏している彼の姿がよく見えます。

自己紹介が終わってから、ずっとこの状態の彼に、私は声をかけます。

「あの、大丈夫……？」

と。

すると、彼はこちらを向き、やや間をおいて、言いました。

「えーと、流那、だっけ？」

「えっ！？は、はい……」

呼び捨てで呼ばれて、あたしの心臓は高鳴ります。

ああ……そうだ……

あたし、この人の事が好きなんだ……

彼は覚えてないであろう、

……二年前、初めて会ったあの日から……。

——二年前。

中学三年生になったあたしは、始業式とその他の予定を終え、家に帰ろうとしていた。

が、しかし……。

ザアアア……。

突然の雨により、傘を忘れたあたしは、学校の玄関から一向に止む気配を見せない雨を見つめる事しか出来ませんでした。

『……どーしたんだイ？』

雨を見つめるあたしの後ろから一人の男子生徒が話しかけてきました。その手には一本の折りたたみ傘が。

『えーと、傘を忘れてしまつて……』

戸惑^{とまど}いつつも、彼の問いに答えるあたし。

そんなあたしに彼が……。

『ん』

そう言つて、折りたたみ傘を差し出してきました。

『そ、そんな……！悪いですよ！会ったばかりのあなたに傘を借りるなんて！』

『そー？じゃーさ、』

そう言つて、彼は続ける。

『家どこ？送つてくよ』

『えっ！？なんでそーなるんですか！！？』

『だってよー、すげー雨だぜ？』

そう言つて、彼は空を見上げた。

しばらく言い合いを続けた結果、あたしは駅まで彼の傘に入れた。もらう事になった。

・・・彼の、傘に？

『相合い傘あ！？』

『ほれ、濡れるぞ』

『ひゃあ！！！！』

声をあげるあたしに構わず、彼はあたしの肩を抱いた。

緊張しすぎて、駅まで送ってもらつまでの記憶がない。

駅に着く頃、雨は止んでいた。

『すみません、わざわざ送ってもらつちゃって・・・』

『いーって、ちょうどこの辺にある本屋に用事があったとこだし・
・・・・』

謝るあたしに、首を横に振りながらそう言う彼。

『じゃ、俺はこれで・・・・』

『あつ！ちよつと待っ・・・・』

あたしの声に構わず走り去る彼。

そして、彼と相合い傘をしていた事を思い出し、ドキドキする
あたし。

これが、あたし、夜月流那が、彼、暁春斗に恋に落ちた日の出来事・
・・・・

第十一幕 流那な春斗の放課後——2（前書き）

評価・感想・ダメ出しという名のアドバイスなどをいただけるとありがたいです。

第十一幕 流那な春斗の放課後——2

「ゴ、ゴメン！いきなり呼び捨てしちゃって……………」

彼はあたしを呼び捨てした事を謝る。

「う、ううん！呼びやすいように呼んでくれていいから……………」
それより、大丈夫？」

「え？」

「自己紹介が終わってからずっと元気なかったから」

まあ、あんな事言っちゃったら無理ないと思うけど。

「……………心配、してくれてたの？」

彼の問いにあたしはうなずく。

当たり前でしょ？あなたの事好きなんだもん。

「優しいね、流那は。大丈夫だよ、心配してくれて、ありがとう」

「ふあ……………優しいなんて……………ありがとうって……………」

や、やめてえ！満面の笑みでそんな事言わないでえ！そんな事言われたら……………あたし……………あたし……………。

「……………きゆう。」

あたしはそこで意識を失った。

みなさんども、春斗です。

俺は今、今日クラスメイトになったばかりの女子、流那を抱えて、保険室に全力疾走……。しようかと思いましたが、流那に負担がかかるといけないので、ゆっくり歩いて保険室にむかいます。

……。決して、流那から伝わる柔らかい感触やいいにおいを手放すのがおしいとか、彼女の寝顔(?)をもっと見たいというワケではありません。マジで。いやマジで。だから、そんな変態見るよーな眼で俺を見ないで。

……。つか誰に言ってるんだろ、俺。

第十二幕 忘れ物と寝てる人にはご用心

「ああ．．．．．おう．．．．．え？千秋？．．．．．ああ、ちょっとかわって．．．．．」

さわでいーかつぷ（こんにちは的なアレ）、春斗です。さて、無事に流那を保険室に寝かせた俺は今、校門の前で冬輝とケータイで話しています。

「．．．．．じゃーな、あと、へそくりのありがたはテレビの裏じゃねーから」

ケータイのむこうの千秋にそう言っていると、俺は電話を切った。

「．．．．．さて、帰るかな」

俺はそう呟くと、自宅へ帰ろうと歩き出した。

．．．．．が。

気づいてしまった。流那を保険室に運ぶために、カバンを教室に置いたままだという事に。

「取りに行くか」

俺は回れ右をして、教室に戻る。

「これでよし、と」

カバンに荷物を詰めると、俺はカバンを持って教室を出ようとしたが、カバンが上にのせられている流那の席に目をとめた。

．．．保険室からこの教室まで結構距離あるんだよね．．．

「．．．．．持ってってやるか」

俺は流那のカバンを持ち、保険室へむかった。

「．．．．．すう」

俺が保険室についた時、流那は備え付けのベッドで寝息をたて

ていた。

「……………帰るか」

俺はそう呟いて、流那の寝ているベッドのそばにあるふたつの椅子のうちのひとつに流那のカバンを置いて保険室を後にす……………

——ガシッ！！

……………るはずだったが、俺の制服をつかんだ流那（状態・ねむり）がそれを許さなかった。

「……………しゃーねーか」

俺はそう言うと、カバンを置いてない方の椅子に座り、流那（状態・ねむり）の目覚めを待つ事にした。

第十三幕 めざめよ……

「……………すう」

オッス！オラ春斗！絶対見てくれとはいわないけど、出来れば見てくれよな！

さあ、放課後になり、後はミスウィートホームへ帰るだけなのですが、制服をつかんだまま眠るクラスメイト、流那（状態・ねむり）がそれを許してくれません。

「こーゆー時に限って保険室の先生はいねーし……………」

来る気配もねーし。

「……………むにゃー」

コイツは起きねーし。

狙ってたゲームは発売延期になるし。

……………ぐうぐう。

腹は減るし。

「……………すう」

コイツは起きねーし。

「・・・・・・・・ふぁーあ」

俺まで眠くなってきた・・・・・・・・し・・・・・・・・。
・・・・・・・・おやすみ。

どーも、流那です。あたしはどーやら、寝てしまったようです。

・・・・・・・・暁君（状態・ねむり）の制服をつかんで。
ってなんで！？なんであたし寝てたの！？

なんで暁君の制服をつかんだの！？

口笛はなぜ遠くまで聞こえるの！？

なんで・・・・・・・・

暁君は寝てるの！？

「・・・・・・・・ん」

起きちゃった！

「・・・・・・・・ああ、起きたの？」

こっちのセリフ。

いや、それより……

「……………ごめん、迷惑かけちゃった？」

「ん？……………いやいや、済んだ事にすんなよ。じゃ、俺帰るから」

「あつ、待つ——」

「じゃーな、流那」

彼はそう言って、保険室を出て行った。

「……………」

彼が出て行った後、あたしは自分のほっぺをつねった。

——ギョツ

「……………痛い」

痛かった。

夢じゃ、なかった……………。

第十四幕 春眠曉を覚える（前書き）

新キャラ登場。

第十四幕 春眠曉を覚える

「・・・・・・・・ふあ」

どーも、春斗です。

今日は休日なので、爆睡しました。

さて、目覚めた俺は二階の自分の部屋から一階のリビングに移動します。

「ずいぶん寝てたね、春斗」

「ぐっもーにん、アニキ」

「ぐっもーにん・・・・・・・・もう昼になるけど」

この人は俺の兄、あかつき暁侯だ。

優しくて、頭がよくてカッコイイ、自慢の兄だ。

「ありがとう」

「え？・・・・・・・・ああ、うん」

こんな風に、時々心を読むのはいただけないけど・・・・・・・・。

「オヤジと母さんは？」

「父さんは仕入れ、母さんはロッククライミングだ」

『おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へ洗濯に行きました』的なノリでそう言う我が兄。

俺の母親、暁ひより日和はかなりアクティブな人で、この間は、

「ツチノコを探しに行く」と言っ、琵琶湖に行った。なぜ琵琶湖？

ちなみに、俺のオヤジ、暁はるひこ春彦は、ウチでスイーツ店

「甘ったるくて、どもすませんした」のオーナーだ。

そっぴや昨日、

「明日は店を休みにして、新作スイーツの材料を仕入れて来る」って言っ、たっけ。

「そっか・・・俺も出掛けよーかな」

「いいけど、これ位は食っ、てけよ」

そっ言っ、てアニキは、目玉焼き、サラダ、トーストが入ったアニキ特製

「まさに朝食」セツトの皿を差し出した。

「へいへい、いただきます」

そっ言っ、て、俺は

「まさに朝食」セツトを食べ始めた。

アリ？オチがねーや。

まあ、いつか・・・。

目玉焼きウメー。

第十五幕 だぜ。(前書き)

久しぶりの更新。多分、これから先も不定期になると思います。

第十五幕　だぜ。

どもッス、前回から引き続き春斗です。

朝食（？）を食べ終え、俺はとりあえず近くの公園でなごむことにしましたとさ。

めでたしめでたし。

「終わらせるな！」

後ろから鋭くつつこむ声。振り返るとそこには……………。

「血の涙を流すキューピーが！」

「なんの怪談話！？後ろ振り向いてそんな状態のキューピーいたら普通に怖いから！」

キューピーのボケにそんな風につっこむナツミカンが！

「おっそろすい……………」

「何が！？」

「ついがお前、もしかしてせつかくの休みに一人であても無く街をさまよい歩いてんの？ロンリーガールめ」

「どーせあんたも同じよーなもんでしょ？ロンリーボーイ？」

「おあいにく様。俺にはこれから公園でなごむという重要なミッションがあるのだよ」

「あるのだよ、じゃないわよ。要はやる事が無いから公園ほーっとするだけでしょ？」

「ぬぐっ……」

返す言葉もゴザイマセン。ナツミカンめ、言うようになったな……。

「でもいいモンだぜ？ただぼーっとするだけっつーのも。公園を吹き抜ける風が気持ちいいんだぜ？日差しが心地いいんだぜ？ポ○モンゲットだぜ？」

「だぜだぜっつさい！まあ、分からなくもないけど……」

「うし、じゃー行こーぜ」

「ちよつと、私いくなんて一言も……」

「公園へレッツゴー、だぜ」

「オカシイ！だぜの使い方がオカシイ！」
とゆーわけで、俺たちは公園に向かった。

「どーゆーわけで！？」

第十六幕 出会いとラブストーリーは突然に？（前書き）

久々に書いたら長くなりました・・・

第十六幕 出会いとラブストーリーは突然に？

くく 前回のあらすじ

憧れのミサ先輩への告白前夜、レイトは幼なじみのナナに河原に呼び出される。

そしてレイトはそこでナナに告白されてしまう！

「レイトがミサ先輩を好きなのは知ってる……。でも、もう我慢出来ない！あたし、レイトの事が好き！」

自分の胸から溢れんばかりのミサ先輩への気持ち……。

自分を一途に想ってくれる幼なじみ……。

彼は、果たして……

「どっちを選ぶべらアアア！何しやがる！ナツミカン！」

突然のアップパーカットによりあらすじを中断された俺、春斗は発生源であるナツミカン（捕獲レベル9）にシャウトした。

「こっちのセリフよ！何このあらすじ！？

本編と関係ない上に微妙に凝ってるし！

むしろこの設定で恋愛小説かけよ！」

「くおのバカチンがあー！この小説の作者なめんなー！コイツに恋愛小

「説かけると思ってたのかぁ！バカ作者なめんじゃねえ！」

「なめるどころか中傷してる奴にいわれたくないわよ！」

俺たちが論争を繰り広げているここは、安芸波第一公園。

休日と言つ事もあつてか、このだだっ広い公園には、家族連れが楽しそうに弁当を広げている。

そういえば・・・

「ここでナツミカン達と出会ったんだよなあ」「・・・ハル、変なモノでもたべた？」

「なにゆえ？」

「や、なんか遠い眼してるし、首に紫色のじんましん出てるし」

「うぞつ！？どの辺！？」

「後のはウソ」

「ぐっ・・・腐ったミカンめ」

「そうだよね・・・ここで初めてあんたと出会ったんだよねえ・・・」

そう言つと、ナツミカンは遠い眼をした。

視線の先には、サッカーをする子ども達。

十二年前、俺はここに引越してきた。

引越して来て間もない頃、俺はこの公園の片隅でよく体操座りをしていた。

いつものように体操座りしていると、

トンッ！

足に何かが当たった。

見ると、そこにはサッカーボール。どこから転がってきたようだった。

少しして、足音が聞こえた。

足音の主は、サッカーボールの前で止まった。

サッカーボールの先に青い靴が見える。見上げると、そこには、俺と同じくらいの男の子がいた。

少し鋭く、意志の強そうな瞳を持った、整った顔立ちの少年だった。

「・・・・・・・・ぼ」

「え？」

少年の言葉を聞き逃した俺に、少年はもう一度、さっきよりも通った声で言った。

「・・・・・・・・あそぼ」

「・・・・・・・・俺と？」

少年は頷いた。

「おい！フュー！」

少年の後ろから元気な声が聞こえた。

「ボールあつた・・・誰？その子」

元気な声の主であるその女の子は俺を見てそう言つと、首をかしげた。その後ろにいた可愛い女の子も同じように首をかしげた。

「・・・・・・・・友達」

少年はニコツと笑つてそう言った。

「その後4人でサッカーしたんだよな」

「そうそう、それで千秋ちゃんのシュートがカツアゲしてた不良に

当たったんだよねえ」

「ああ、それでその不良泡吹いて倒れて、ちょっとした騒ぎになったんだよな」

元気な声のナツミカンと俺は思い出話に花を咲かせた。

「じゃね！ハル！」

俺はそう言って帰宅する隣人を見て、思った。

お前らがいたから、今の俺がいるんだ。

照れくさくて口に出して言えねーけど………

ありがとな、ナツミカン、千秋、冬輝。

家に入る直前、俺の視線に気づいたのか、ナツミカンがこっちを見て、言った。

「どーしたの？変な顔して。

あと、ほっぺに緑色の発疹が出てるわよ？」

「どーせまたウソだろ？」

「……………」

パタン。

ナツミカンは無言で家の中に消えた。

「・・・え？ウソだよね？・・・おい、ナツミカン？・・・
・夏魅さん？・・・夏魅さまアアアアア！！！！」

第十六幕 出会いとラブストーリーは突然に？（後書き）

ちよつと過去編っぱいのを書いてみました。
どを送っていただけるとうれしいです！

感想や意見な

第十七幕 前髪失敗すると地味にへこまね？

「春斗君、髪伸びましたね」

下校途中、千秋は俺にそんなことを言った。

ナツミカンは学校から直接バイト先に行き、冬輝はいつの間にかいなくなっていたので、今日は千秋と二人で帰る事になった。

「ん、そうか？」

そーいや、最近切ってねーな

「そろそろ切りにいくか」

「私が切ってあげましょうか？」

「千秋が？」

「ええ、これでも腕には自信があるんですよ？」

ほう。

「せいやー！」

「おごほおー！」

ドガァン！

千秋が突然放った右ストレートを俺はギリギリでかわした。空を切ったソレは、俺の後ろにあつた電柱を粉碎した。

「ねっ」

「ねっじゃねーよ！

何！？腕に自信あるって腕力の話！？散髪関係ねーだろが！」

「ありますよ！この腕力により一息に斬る事で淀みのない切り口を生むんです！」

「オイイ！何を斬るつもりだお前は！？」

「あ、春斗君、ウチに寄っていきます？斬ってあげますよ？」

「何をだよ！冗談じゃねー」

ドゴッ！

千秋に握りつぶされた電柱の破片が塵と化した

「斬ってあげますよ？」

ものっそいい笑顔で千秋はそう言った。

「…………ヨロシクオネガイシマス」

「お客様、今日はどのようにいたしましょう？」

テルテルボーズみたいな格好で椅子に座る俺に千秋が言った。

「じゃーモヒカンで」

「いえっさー」

ヴィイイン！

「すーっぷ！」

ビビった！なんの躊躇もなしにバリカン突入させようとしたんですけどコイツ！？

「冗談だから！今の冗談だから！」

「なんだーてつきり主人公なのに地味な自分に嫌気がさしてイメチェンを図ったのかと思いましたよ」

切られた。心が。バツサリと。

「ハア、もういい。少し短くするカンジで頼む」

「なんでやねーん！」

「いや、冗談じゃねーから！突っ込む要素なかっただろが！」

「かしこまりました♪」

千秋はそう言つてはさみを持った。

変わったはさみだな……

禍々しい装飾がしてあるし、でかいし、何より刃がひとつしかない。

「つかコレ、まるで死神の……」

「れつつ・かつていんぐ！」

「鎌じゃねーか！」

千秋の放った一撃を、俺はお辞儀をするカタチでかわす。

「動いちゃだめじゃないですか！前髪失敗しますよ？」

「ウッセーよ！前髪どころか命根こそぎ刈り取られる所だったわ！」

「さーて、冗談はこの位にして……」

「冗談かよオオオオオオ！！！！」

第十八幕 一家に二冊よい子の絵本（前書き）

久しぶりの更新です

第十八幕 一家に一冊よい子の絵本

静かな空間・・・・・・・・

綺麗に並べられた本棚・・・・・・・・

そして、その本棚にぎっしりとおかれた本・・・・・・・・

どーも、春斗です。今日オレは図書館に來てます。

なぜかというと・・・・・・・・

図書館がオレを呼んでいたからSa

・・・・・・・・ごめん、自分で言っというて腹立ってきた。もう言わない。

なんて事はない、暇でその辺ブラブラしてたら偶然図書館にたどり着いて、「久々に入ってみんべー」的なノリで入っただけです、ハイ・・・・・・・・

さて、なに読むか・・・・・・・・ん？

『よい子の絵本コーナー』

（絵本か・・・・・・・・たまにはいいか）

そう思ったオレは本棚から絵本を1冊抜きとると、空いてる席に座

った。

さーで、タイトルも見ずにテキトーにとってきたからなあ。

えーと、コレは……………

『××太郎』

え……………何コレ？放送禁止用語？

まあいいや、読んでみよ。

『むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。

ある日、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯へいきました。

おばあさんが川で洗濯をしていると川上から大きな——』

（なんだ、桃太郎か……………。）

『ケフィアが流れてきました。』

ケフィアかよ！

つーか大きなケフィアってなんだよ！ケフィアって固形物だっけ！？

『「あらまあ、こいつはでっかいケフィアだべえ！」おばあさんはケフィアの入った大きなカップを川から拾い上げ、うれしそうにそれを持ち帰りました。』

カップに入ってたのかよ！何その説明不足！
てか、本当にでか！ケフィア入ってるカップ！しかもケフィアものっそい入ってる！

『芝刈りから戻ってきたおじいさんに、おばあさんはケフィアみれで大きなケフィアの事をおじいさんに言いました。』
こぼしちやった！？持って帰る途中でケフィアこぼしてかぶっちゃった！？

『おじいさんとおばあさんがケフィアを飲もうとしたその時！

ケフィアの中から赤ん坊が飛び出してきました！』

こえーよ！つーか、このシーンの絵、やけにリアルだし！
ああ、おじいさんまでケフィアまみれになっちゃったし！

何だよこの絵本！こんな子ども見たらトラウマになるわ！

『子宝に恵まれなかった二人は、この赤ん坊を自分たちの子どもと

して育てる事にしました。……ケフィアまみれで。』

ケフィアまみれ強調しなくてもよくね？

『「おじいさんや名前はどっしようかのう？」

「そうじゃのう、ケフィアから生まれたから……。」』

ケフィア太郎とかそのあたりか？

『「アントニオにしよう」』

なんでだよ！

ケフィア関係ねーじゃん！

しかも太郎じゃねーし！タイトルの意味は！？

『アントニオはすすくと成長し、大人になった彼は、自分の部屋でひたすらテレビゲームを楽しむ日々を送っていました。』

アントニオひきこもりになってんじゃねーか！

『そして、なんやかんやでアントニオは鬼退治の旅に出ました。』

なんやかんやを言えええ！

『アントニオが歩いていると、不良が近づいてきました。不良は言います。「オイ！アントニオ！尻ポケットに入ったサイフよこせやコルア！」』

アントニオカツアゲされてる！

『アントニオは不良を叩きのめすと、不良の身ぐるみをはぎました。収穫を見て、アントニオは言いました。

「五万か、しけてんな」』

もうこいつが鬼じゃねーか！もういい！こんなのよんでられっか！

オレは席を立つと、『××太郎』を本棚に戻し……………

戻……………し……………。

「あれ、ハルじゃん」

家に帰る途中、ナツミカンに会った。

「なに、どっか出掛けんの？」

「いや……………図書館いつてきて、今帰り」

「ふーん……………なんか借りたの？」

オレのトートバッグを見てナツミカンが言った。

「うん、まあね……………絵本を、一冊……………」

第十九幕 体育倉庫・・・わくわくすっぞ！

みなさんども、流那です！

あたしは今、ドキドキしています！なぜなら・・・

「ごめんな、流那・・・」

先程謝罪の言葉を口にした彼、春斗くんの顔が目の前にあるからなのです！

さらに言えば、あたしは彼に、その・・・押し倒される形で体育倉庫の床に仰向けに倒れています。

「う、ううん！だ、大丈夫！」

何一つ大丈夫じゃありません。もし誰かに見つかったら・・・それ以前にあたしの心臓があ！

ううう、なんで・・・

「どーして・・・」

「「こんな事に・・・」」

さかのぼる事5分前

「んしょ、んしょ」

あたしは体育で使ったハードルを片付けていました。
次で最後、という所で、

「あり、流那じゃん」

後ろから春斗くんが声をかけてきました。

「は、はは春斗くん！？どう、どどうしてここに！？」

「落ち着けよ、なんかしらんけど。オレは体育で使ったボールを片付けに来ただけだ。女子も今体育終わったのか？」

バスケットボールをわきに挟んだ春斗くんが言いました。

「うん、これを片付けたらおわり！」

そばにあったハードルをポンポン叩いて、あたしは言いました。

「そうか、オレもこれでラスト・・・つと！」

そう言っつて、バスケットボールの入ったカゴをめがけて、ボールを投げました。

・・・が。

ガンッ！

ベキッ！

ごすー！

「あう！」

放たれたボールは倉庫のいろんな所を跳ね返り、最後にあたしの頭にクリーンヒットして地面に落ちました・・・。

「ごめん！大丈夫か！？流那！」

「だ、大丈夫・・・」

ガタガタ・・・

「え？」

「！あぶね！」

ドンガラガッシャー

「あ、あじゃぱー！」

「うおわぁ！」

どうやらボールが当たった衝撃で倉庫のものが崩れてあたしめがけて降って来たようです。

春斗くんはあたしを押し倒す形であたしを庇ってくれました。

「いつて・・・大丈夫か、流那？」

「あ、あたしより春斗くんが！」

「・・・・・・・・」

し、しまった！変な事言っちゃったかな！？

「・・・ぷつ、あはは！言われてみりゃそうだな！じゃあなんか話すか！」

「は、話すっていつでも・・・。」

話題が・・・男の子って普段何話すんだろ・・・。なんて思っていたら、

「んじゃー、流那はさあ、」

春斗くんが口を開きました。

「にゃ、にゃに！？」

かんじゃった！

「甘いもの好きか？」

「しゅきでしゅー！」

またかんじゃった！はずかしー！

「そっか、じゃーここを出られたらさ・・・お？」

「？ど、どうしたの？」「

「なんか、体が軽く・・・」

ガチャガチャ！

「・・・春斗、大丈夫か？」

「冬輝イ！」

「・・・帰りが遅いから。」

「心配して来てくれたのか、助かったあ！」

助かった・・・でも、でも・・・

「・・・心配するな。」

「・・・え？」

「・・・口外はしない。そんな野暮な事はしないさ。」

白雪くんはそう言っつてフツと笑った。

ありがたいけど、ナニか勘違いしてる気が・・・。

「そんじゃ戻るか、もう授業始まっちゃう。っと、そーだ流那」

「な、何？」

第十九幕 体育倉庫・・・わくわくすっぞ！（後書き）

どうも、久しぶりの更新です！待っていてくださった人・・・はいるのかしら？

もしおられましたら、おまたせしました！それと、こんな小説を読んでもくださって、本当にありがとうございます！

更新は相変わらず不定期ですが、いつ更新するかぼくにも分かりませんが、これからもよろしくお願いします！
長くなりましたが、これにて！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373g/>

劇団Siki

2011年10月5日20時51分発行